

〈特集〉日本大学国文学会 講演

方言ドラマが出来るまで

—「方言指導」という仕事—

河原田 ヤスケ

1. はじめに

皆さん、こんにちは。本日は、「方言ドラマが出来るまで—「方言指導」という仕事—」という題で講演させて頂く事になりました、俳優、河原田ヤスケ（本名・河原田安啓）と申します。

舞台、テレビ等で演じるのは恥ずかしくはないのですが、今日はどうも苦手な部類の「講演」という仕事です。勝手は違いますが、ドラマでの「方言指導の仕事と現状」を知つて頂くいい機会だと思い、受けさせて頂きました。きっかけを作ってくださった田中ゆかり先生に感謝申し上げます。

私自身「河原田ヤスケ先生」とご紹介頂くのは照れくさいのですが、撮影現場などでは業界用語で「先生」と呼ばれます。時代劇等の所作指導の方も先生、殺陣師の方も先生と呼ばれていますので、そのまま進めていきたいと思います。

さて、田中先生との出会いですが、早稲田大学小野記念講堂で開催された、シンポジウム「ドラマと方言の新しい関係ー『カーネーション』から『八重の桜』そして『あまちゃん』へー」¹⁾の時でした。

たまたまある劇場でその開催チラシを見て、当事者でもある私ですので、関心があり参加させて頂きました。シンポジウム終了後の懇親会で田中先生と知り合ったという次第です。

2. 協同組合日本俳優連合とは

本題に入る前に、後で関連する事ですので、もう少し自身のことについてお話ししたいします。

ところで、私が理事として務めています、「協同組合日本俳優連合」という団体を皆さんご存知でしょうか。おそらく知らない方が多いでしょう。

例を挙げますと、アメリカでは、実は労働組合の力が強く、俳優の実演家としての地位がとても大切に守られています。アメリカのほとんどの著名な俳優は、俳優のための

労働組合に入り、堂々と政治的発言もしています²⁾。

日本の場合には全く比較にならないのですが、正式には今から43年前、1971年（昭和46年）2月に結成されたのが協同組合日本俳優連合です。現在、日本で唯一、俳優の諸権利向上のために活動している団体で、組合員は映像、声優、殺陣アクションを含め約2,500名です³⁾。日本の俳優の1割弱、声優の8割が加入しています。

日本では残念ですが実演家の地位は低く、使う側のTV局や映画制作会社の影響力が圧倒的に強いという現実があります。組織率や運営、形態等（労働組合・協同組合）が違うため単純に比較は出来ませんが、アメリカ人俳優との意識の違いが際立っており、自らの向上のために行動する俳優の極端に少ないので日本の現状です。

協同組合日本俳優連合は他関連団体と共に、声優のランク表の確立、NHKでのランクに基づく視聴覚実演家の出演料のアップ、スタジオ撮影や現場ロケでの事故に備えた労災保険の適用、民放各局との交渉窓口、また幅広いマスメディアが映像等を通して使用した場合の著作権の擁護など、二次使用料の更なる権利獲得のために尽力しています。

3. 方言ドラマと協同組合日本俳優連合

ところで、方言指導者の氏名表記ですが、今から34年前の1980年（昭和55）にNHKで放送された、佐藤千夜子⁴⁾がモデルとなった『いちばん星』⁵⁾を例にお話しします。この番組で、方言指導者は「山形弁」の方言指導をしたのですが、山形弁はつかず、方言指導〇〇と俳優名が明確に表記されていたようです。

やはり今から31年前、1983年（昭和58）の連続テレビ小説『おしん』⁶⁾もそうだったと、いずれも方言指導をされた先輩女優さんから伺いました。しかし、方言に関していえば、NHKの取り組む姿勢は今よりも大変熱心だったそうです。これはまた、非常に重要な事で、最後に再度触れたいと思います。

その『おしん』から8年後の1991年（平成3）に「方言指導懇談会」が日本俳優連合の中で組織化されました。これが、本日のお話の本題となります。

4. 「方言指導懇談会」組織化の目的

「ドラマの中の方言を考える」をキャッチフレーズに、テレビ・映画など映像作品の中でより効果的な方言の台詞を使うための研究が大きな目的でした。また、同時にもう一つの大きな目的として設定されたのが、方言指導をする際の指導者の待遇を確立することでした。

ところが現実には、ドラマの制作現場において、監督やディレクターが気安く「君は〇〇の出身だろ？ちょっとこのしゃべり方教えてやってよ」という具合に、ただ働きさせているケースが多かったそうです。そこで「これではいけない。特殊技術にはそれに見合う報酬が確立されなければならない」との認識に至り、組織化の話が立ち上がりました。

従来の片手間扱いからきちんとした職業としての扱いにして貰うためには、日本俳優連合の中に確固とした組織を立ち上げる必要があったと聞き及びます。

5. 方言指導とは

ドラマの中に方言の台詞が出てくる場合、それをどのようにこなすかはなかなか難しい問題です。郷土色をより鮮明にするためには発音やアクセント・イントネーションもその地域独特のものにしなければなりません。しかし、郷土色が出すぎてしまい、その土地の出身者でなければ分からぬところまでいってしまっては、かえってドラマの面白さを殺してしまうでしょう。

特にテレビドラマとなれば、全国の視聴者に理解して貰うことが出来て、しかも郷土色も損なわないしゃべり方が求められることになります。

6. 方言を教える

方言を教えることは、その土地の出身者であれば、まず、誰でも可能でしょう。言語学者であれば、もっと理想的とも言えます。

しかし、ドラマの中の台詞の扱い方となると、これは俳優でなければ出来ないということになります。演技をこなし、様々な仕草を考えながら台詞を読むとなると、そこには自らの話すことばだけでは済まされない発音・アクセント・イントネーションが必要になりますから、標準語（全国共通語）で書かれた台詞を方言に翻訳する際には、芝居が分かっていないと出来ないと出来ないという問題が出てきます。つまり、そこには特殊な技術が必要なわけで、誰でも出来るという話ではない。また、片手間で出来るという話でもないということになります。

7. 方言指導を担当する場合

方言指導を担当するにあたっては、主に次の様な形で進められます。

① ドラマの台本を読み、全体を把握する。

② 台本直しにかかる。

作者（シナリオライター）が書いた台本の方言に直す台詞の部分を修正する。

③ 方言で台詞を吹き込んだものを作成する。

ここでは、ICレコーダー・CD・テープ等で、同じ台詞を次の様に2回入れます。

1・感情を出さずゆっくりと入れ、どの様な方言かを知ってもらう。

2・感情を出し、台詞として入れ、聞かせる。

大切なのはキャストの役に合った話し方で、実際の出演者に分かりやすいように手本を示すことです。

④ リハーサル・本番に立会う。ロケの場合は同行する。

発音の間違いを指摘するだけではなく、方言にふさわしい身振りも示す必要があ

るからです。これは結構な拘束力を伴う重労働だという事を感じて貰えることでしょう。

それではここで2013(平成25)年に担当しました『八重の桜』⁷⁾の現場での指導状況とドラマの一部を観て下さい。

『八重の桜』現場指導状況・『八重の桜』オープニング部分の上映

次に、方言での演技を体感してもらうため、会津弁で昔話を語ってみましょう。ここでお話しするのは「鬼の婿入り」です。

あらすじは、雨が降らなくて困ったお百姓がふっと独り言をいった。「家には娘が三人もいんだがら、一人ぐれい、くれでやってもいいだげんじよもなあ」その独り言を何処かで聞いていた「鬼」が雨を降らせてしまい、約束通り、末娘の「お福」をかっさらつていった。ある時「お福」が「鬼」のいない間に家に逃げ帰ってくると…というものです。それでは、お聞きください。

会津弁での「鬼の婿入り」の朗読

次に、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を、まず皆さんの中から標準語で語ってもらった後、会津弁で語ってみたいと思います。

参加者(国文学科学部生)による「雨ニモマケズ」の朗読

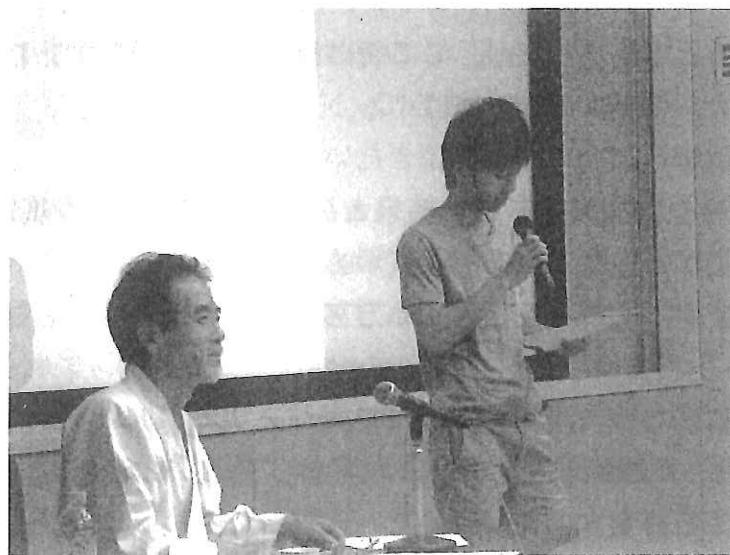


写真1. 参加者の朗読を見守る河原田さん

それでは、次に会津弁の「雨ニモマケズ」を朗読します。

会津弁での「雨ニモマケズ」の朗読

❸ 実際の方言指導場面

次に、『八重の桜』の方言指導場面を、実際に使用した台本とともにお話ししたいと思います。『八重の桜』の台本は、このような物です。



写真2. 『八重の桜』の台本を示しつつ、方言指導の実際を語る河原田さん

❹ 方言指導者における現場の問題と課題 (NHKの対応)

冒頭、最後に触れると申しましたが、ここではNHKの「ドラマの方言を考える」という観点から話を進めたいと思います。決して、NHKを批判的に言おうとしているではありませんので、誤解しないで聞いて頂きたいと思います。

俳優にとって台詞の根幹を成す方言を結果として重要視しない環境が、NHKにはまだ残念ながらあるのではということを感じています。また、ことばを一番大事にしなければならないはずですが、それらを指導する方言指導者としての地位もまだ低いと思っています。

私が『八重の桜』に関わった事で分かった事実があります。1980年代初頭は方言指導者としての待遇、見合った報酬はまだ確立されておらず、相当安かったと聞いています。しかし、ことばとして方言を大切にしていた。先程若干触れましたが、そのような環境が整っていたようです。

それでは、現在の待遇はどうでしょうか。

日本俳優連合の地道な交渉によって、現在は方言指導者に対する報酬は随分改善されました。しかし、方言指導者としての適性をきちんと判断するといった、要の所が曖昧です。方言指導という特殊技術でありながら、テレビ出演に俳優を売り込むプロダクションが、所属する地方出身の俳優のうち、方言指導を行っても良いという俳優を売り込み、その売り込み次第でNHKも受け入れるという状況になっています。

方言に関しては、余程のことでもない限り、プロデューサーもディレクターもほとんど分かりません。方言指導をする俳優が初めての人でも、ベテランの人でも、その適正を見極める基準がなく、方言指導者に全て任せてしまいます。ですから、方言指導者の指導方法により、その「方言ことば」を使用する地元の方がドラマをご覧になった時、変な方言だと違和感を持たれる場合も有り得る事になります。

方言ドラマを担当する制作責任者は、俳優のキャリアや方言指導の実績も兼ね備えた方言指導者を、日頃より把握しておく必要があるのではないかと痛切に感じています。

それでは、『八重の桜』はどうだったでしょうか。今回会津弁方言指導者は3人がつきました。普通は各方言に対し方言指導者は原則1人となっていますので、方言指導者がひとつの方言に3人もつくというのは大河でも珍しいことでした。それだけ、『八重の桜』に関してはNHKも力を入れたということになるのだと思います。

この『八重の桜』においては、方言指導は次のような形で進められました。

- 台本直しと俳優（男優）への方言テープ吹き込み（河原田）
- 女優への方言テープ吹き込み（女優）
- リハーサル・本番立会い（声優）

しかし、ここで大きな問題がありました。肝心かなめのリハーサル、本番で指導された声優の方は方言指導が全く初めての方だったということです。本人に責任はなく、やる気満々でしたが、その任はとても重かったと思っています。

そのため、私の方から担当制作者に相談し、吹き込んだ方言テープを渡し、それを学んで貰いながら現場で指導して貰うといった、普通では考えられないような事が起こりました。そこには、先に申し上げました「方言指導を担当する場合」の①～④の連携が欠けていたように思います。

いくら机上にて台本を直し、テープに吹き込んでも、撮影現場の俳優、女優の息吹を感じた場合、その俳優に即した「方言」に直さなければならない時も現場ではあります。瞬時に助言しなければならないのです。方言指導者を受け入れるにあたっては、そのドラマの根幹を左右するのですから、きちんとした受け入れ体制を整えてほしい。その責任が公共放送のNHKにはあるのだという事を認識して貰いたいと思っています。

方言指導者の氏名表記も問題です。最近のドラマから、方言指導の氏名表記を見てみます。もちろん、そのドラマで方言が使用された場合ですが、例を上げますと、『あまちゃん』

ん』⁸⁾は毎日、『ごちそうさん』⁹⁾は週に一度、『花子とアン』¹⁰⁾は毎日、スタッフロールに氏名が表記されました。

さて、『八重の桜』ですが、『八重の桜』の会津弁（会津ことば）の方言指導者は3人でした。3人表記は初回だけ、後は交代で順番に表記という形になりました。

各ドラマの制作上の都合で氏名表記を決定している事実が、上記例でも明らかなのでないでしょうか。方言指導者の氏名表記は現場の制作任せではなく、実演家の立場に立って精査し、改善することが必要です。例えば、NHK内での新たな管轄部署の設立などが考えられます。

また、方言指導者の身分についても問題はあります、こちらについては、たしかに要因もあります。NHK大河ドラマや他の時代劇ドラマの場合、方言指導者は、そのドラマでの方言指導が終わればそれでその仕事は終了します。そこにはベテランもいれば新人もいます。かたや、所作指導者、殺陣指導者は、NHKの場合方言指導者より深く恒常的に関わっていますし、指導者もそれなりの方々の先生が指導されていますので、氏名表記の序列などに反映されています。たまには、そんなところも気にしながらNHKドラマの冒頭のキャスト、スタッフ名などご覧になって見てください。

所作指導や殺陣指導などは時代劇のドラマに取り、欠かせない非常に大事なものです、立場を変え、方言指導をする側から見ると、方言が取り入れられたドラマを制作する場合、それを指導する方言指導者の立場がむしろ一番重要なのはと私はつい思ってしまいます。何故なら、俳優・女優が方言を借り物の台詞ではなく自分の物として言う、そのことばによってドラマが成立していくと考えるためです。

方言ドラマの場合、演出、作者（台本）の意図を把握し、方言を使う事により、その地方独特の色をつけ、厚みを持たせる。方言指導者はドラマの根幹を左右してしまうと言っても過言ではありません。

また持論にもなりますが、作者の台本を方言に直した段階でそこには方言指導者の著作権（的なもの）が発生するのではないかと考えます。確かに完成された台本はありますが、直す方言は方言指導者が作り出したことばだからです。そのような役割を担う方言指導者の立場をもっとNHKには知っていただきたい、理解してほしい、と願っています。

他方、民放在京5局（日本テレビ・TBSテレビ・フジテレビジョン・テレビ朝日・テレビ東京）はどうかと申しますと、昨年の2013（平成25）年1月に放映されたテレビ東京の『白虎隊～敗れざる者たち』¹¹⁾という、会津が舞台の中心となるドラマの方言指導を担当した際は、一部の百姓の役何人かのみを指導しました。会津武士等は全て標準語といった塩梅です。私は今までに民放でも数多くの方言指導をしていますが、民放のドラマは、年配者には方言を適用し若者は方言なしという、残念ながら色を添える程度の使い方がほとんどです。

ですから、民放とは違い、公共放送であるNHKは、日本の各地方にある方言を守り

育てる、といった大切な役割と責務があるといえます。その顕著なものは、NHKが制作する数々のドラマ番組です。ドラマに、日本各県の方言が入ることにより、日本人は日本について、初めてかも知れない新鮮なことばを知ることにもなる訳です。

ちなみに先程から私は会津弁と申しておりますが、NHKでは、現在会津弁とは紹介せず「会津ことば」として紹介しています。他の方言指導でも全て○○ことばで、○○弁という紹介がありません。それについての詳細はわかりませんが、NHKなりの基準があるのかも知れません。

私が45年前、高校を卒業し、演劇の道を志し会津から東京に出て来た時、東北人はなまるということだけで、それに対する冷たい差別が歴然と東京にはありました。

まだ、アメリカが沖縄を占領していた時代ですが、私が当時、アルバイトで一緒だった沖縄の人は更なることばの差別がありました。そのなまりを矯正しなければ、標準語を話さなければ、舞台俳優として大きな役にはつけない時代でもありました。

東京のことばはきついなあ、と感じていましたし、特に私は男でしたから女性の「だからさあ、それでさあ」などと話しているのを聞くと、ああ、なんで俺はこんなことばに慣れなければいけないのだと、沈んだ気持ちになったのを今でも思い出します。会津には10年帰るな、帰るとまたなまりが戻ってしまうと良く言われたものです。

なまりを矯正する教室などに行き、ひたすら会津なまりをとろうとしている自分がいました。当時私は舞台俳優を目指していましたので、他の会津出身者や他の東北出身者よりはなまつてはいなかつたつもりでしたが、そのなまりとは随分格闘しました。

今では、テレビ等で京都弁や大阪弁、広島弁、博多弁、名古屋弁等の方言はよく出てきます。わざとそういう方言で話すタレントも大勢います。翻って東北弁はどうでしょう。先にあげた方言と比べると非常に少ないです。戊辰戦争で会津は「逆賊」とされ、東北地方一帯は新政府から一段低くみられていました。戦後も中央への人材やエネルギーの供給地に留まり、この構造は基本的に今も変わっていません。愛すべき故郷は「他の地方に比べて遅れているのか?」と考えてしまいます。

豊かな文化や歴史があるのに、そんな自信の無さが方言の良さを打消し、なまりとして積極的に表現することを今でも妨げているのではと思います。

言葉とは風土や風習、幼いころから慣れ親しんできたもの全てが表現されています。他の場所に行って自分のことば(方言)が通じず、からかわれたらどうでしょうか。多くの人はきっと「悔しい」と思うでしょう。それは、自分を育てくれた故郷や環境が否定されたように感じるためではないでしょうか。

今、こうして、生まれ育った会津弁を誇りに思い、会津弁の方言指導者として皆さんの前で講演出来ます事に、深く感謝申し上げたいと思います。

『八重の桜』では、作者である山本むつみさんの『八重の桜』の台本50話、会津関係の俳優、女優の出演場面の全てを直させて頂きました。日本全国に、東北6県を代表し、福島県の会津弁が『八重の桜』を通じ、50話全て流れたということは、NHKの大河ドラ

マとしては画期的なことでした。主人公の八重は京都に行っても会津弁を貫いていたのです。会津は先帝のために忠義を尽くしたのだから逆賊ではない。だから卑屈になって会津弁を使わることはしない。そこには強い信念がありました。あの2011年の東北地方中心に起こった大震災がなければ、『八重の桜』の企画もなかったと思います。

途轍もない辛酸を受けた幕末の会津人の、動じる事なく、最後まで会津弁を貫いた「新島八重」の生き様を描く事で、NHKの、東北に勇気を、力を、東北を忘れないでというメッセージが『八重の桜』には流れていたのです。

NHKは、良質な作品もドラマだけではなく数多く制作しております。制作現場のNHKの職員の皆さんには、更に頑張ってほしいと願っております。

最後の締めくくりとしまして、方言ドラマが今後も輝くためにも、「方言指導者」の権利と地位が高まるよう、ご支援、ご声援頂ければ幸いです。

本日の講演、ご静聴本当にありがとうございました。

注

- 1) 当該のシンポジウムは、2014年3月22日、早稲田大学小野記念講堂で行われた「ドラマと方言の新しい関係『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ」(主催：科学研究費「役割語の総合的研究」[研究課題番号：23320087、代表者：金水敏、2011年度～2014年度]、共催：早稲田大学演劇博物館・日本大学国文学会)として開催された。登壇者は金水敏(大阪大学大学院文学研究科教授)、田中ゆかり(日本大学教授)、岡室美奈子(早稲田大学演劇博物館館長／同大学文学学術院教授)、内藤慎介(NHKドラマ番組部エグゼクティブ・プロデューサー／『八重の桜』制作統括)、菫子浩(NHKドラマ番組部チーフ・プロデューサー／『あまちゃん』制作統括)、林英世(俳優／『カーネーション』岸和田ことば指導)の6人。
- 2) 主なアメリカの組合として、SAG (Screen Actors Guild：アメリカ映画俳優組合) がある。同団体は、現在SAG・AFTRA (Screen Actors Guild / American Federation of Television and Radio Artists) という団体名になっており、俳優・アナウンサー・報道官など、約16万人で構成されている。<http://www.sagaftra.org/content/membership>
- 3) 2015年3月現在、俳優の西田敏行が理事長を務めている。
- 4) 山形県天童市出身のオペラ歌手。「東京行進曲」が代表作で、その生涯が小説化・映画化されている。
- 5) 1977年度前期放送のNHK連続テレビ小説(第19作)。原作：結城亮一、脚本：宮内婦貴子、主演：高瀬春奈・五大路子。
- 6) 1983年度前期放送のNHK連続テレビ小説(第31作)。作：橋田壽賀子、主演：小林綾子・田中裕子・乙羽信子。
- 7) 2013年放送のNHK大河ドラマ(第52作)：山本むつみ、主演：綾瀬はるか。
- 8) 2013年度前期放送のNHK連続テレビ小説(第88作)。作：宮藤官九郎、主演：能年玲奈。

(10)

- 9) 2013年度後期放送のNHK連続テレビ小説(第89作)。作:森下佳子、主演:杏。
- 10) 2014年度前期放送のNHK連続テレビ小説(第90作)。作:中園ミホ、主演:吉高由里子。
- 11) 2013年1月2日に「新春ワイド時代劇」としてテレビ東京で放映されたテレビドラマ。脚本:ジェームス三木、主演:北大路欣也。

【付記】

本記録は、日本大学国文学科主催の河原田ヤスケ氏講演(2014年7月3日、日本大学文理学部図書館3階オーバルホール)の録音資料を基に、ご本人の了解を得て再構成したものです。

(かわらだ やすけ、俳優・方言指導者・協同組合日本俳優連合理事)